

NEWSLETTER #92

年次大会報告

- p. 1 日本ポピュラー音楽学会第 23 回年次大会報告…………… 清水 郁弥

研究例会報告

- p. 3 第 1 回関東地区例会報告…………… 今井 晋
p. 4 第 1 回関西地区例会報告…………… 槇田 盤
p. 7 成城大学グローバル研究センター公開シンポジウム報告…………… 葛西 周
p. 10 河端茂氏と JASPM、チャールズ・ハム氏と JASPM…………… 三井 徹

大会実行委員会より

- p. 12 第 24 回日本ポピュラー音楽学会年次大会に向けて…………… 南田 勝也
p. 12 年次大会発表申し込みについて…………… 安田 昌弘

Information

- p. 13 理事会・委員会活動報告
p. 13 事務局より
会員動静

第 23 回大会報告

個人研究発表 A

清水 郁弥

福田氏の発表は、J-POP の中で、CD が売れた曲とそうでない曲の差異を回帰分析を用いて説明しようと試みたものであり、CD 売上枚数データと歌詞・楽譜が入手できた、1988 年から 2008 年までの 306 曲を分析対象としたものであった。

本発表は、発表者が指導するゼミ内の研究であり、その分析において、一般的な説明変数が存在しないた

1. 福田公正（中央大学）
「J-POP の CD 売上枚数の回帰分析」

め、学生の常識に基づき、楽曲の売上要因を、以下の4つに分類し、特に歌詞・楽曲において16個の説明変数を独自に設定、採用した。

時代要因: ネット配信の普及などが与える時代的影響

宣伝要因: 他媒体とのタイアップの有無が与える影響

歌詞要因: 歌詞中の対句の有無など歌詞が与える影響

楽曲要因: サビの長短などメロディーが与える影響

この変数を用いた回帰分析の結果として DREAMS COME TRUE の「LOVE LOVE LOVE」(1995)の売上、約249万枚が17万枚分が歌詞の諸要因、16万枚分が宣伝要因、20万枚分が楽曲の諸要因によって決定されているとの事例を挙げた。楽曲によって売上決定要因の分析のばらつきはあるが、この分析により調査対象楽曲のCD売上枚数について、変動要因が38.8%説明可能となった。特に1995年から2006年にかけて、時代要因がCD売上を87.7万枚低下させている決定要因となっていることとTV番組のタイアップの有無がおよそ16~21万枚のCD売上差の決定要因となっていることを説明できた。

フロアからの質疑応答では、統計処理の方法に関する質問・意見が多く寄せられた。アルバムとシングルにおけるCD売上の差についての分析上の考慮や本発表で設定した説明変数に対する意見が寄せられ、その中で宣伝要因と分類されるCM・広告の露出時間、タイアップしたドラマの視聴率と売上との関係といった説明変数の改善案や、各要因の統合効果についての指摘がなされた。

本発表は、J-POPにおけるCD売上の差異を先行研究も乏しい中、統計的手法によって説明を試みた研究であり、今後説明変数の詳細化などの分析手法の洗練化やサンプル数の増加による、分析のさらなる発展が期待される。

2. 小野寺彩乃 (ホステス・エンタテインメント)

「デジタル化に進む世界、ガラパゴス化に進む日本」

続く小野寺氏の発表は、従来のパッケージ中心のビジネスモデルを堅持し、独自の発展を遂げている日本のレコード産業の“ガラパゴス化”について、欧米を中心とするレコード・マーケットの状況や関係性を扱

うことで今後抱える問題や解決の方向を論じたものであった。

モバイル配信を中心とした音楽配信が伸び悩み、レコード・セールスが落ち込んでいる日本のレコード産業は、音楽配信に対して未だ優位性を持つパッケージ商品を中心としたビジネスモデルを堅持している。この現象がレコード生産の8割が国内向けである日本市場の独自性に関係していると示した上で、大幅なパッケージ売上低下を音楽配信の成長がカバーできないことによる世界的なレコード・セールスの低迷を受けた形で米・欧州を中心に合法且つ無料(もしくは適正価格)で視聴でき、ウェブ上での音楽発見や共有体験ができることを特徴とした音楽ストーリーミング・サービスが新しいビジネスモデルとして構築されていることを指摘し、ユーザーがウェブ上でDJ/観客として楽しむことが可能なサービス「turntable.fm」を例示した。

日本のレコード産業の“ガラパゴス化”は、国内市場におけるパッケージ商品の高い需要が従来型のビジネスモデルを維持させた結果生じた、インターネット時代に新たなビジネスモデルの構築を選択した他国の音楽マーケットとのギャップによるものだと説明されたが、“ガラパゴス化”を維持させ続けることも限界があり、今後、日本のレコード産業は、ストーリーミング・サービスを積極的にサポートした米・欧州のレコード産業の姿勢を学びながら、移行しなければならないポスト・パッケージ時代の音楽消費とマネタイズ方法の模索が必要との提示がなされた。

質疑応答では、今後の音楽業界のマネタイズの在り方、日本でのパッケージ商品の役割の今後の推移、音源の聴取以外のサービスの在り方などを話題として活発な質問・議論が交わされ、脱パッケージ化が進んだ今後の音楽市場で最後までCD等パッケージ商品を生産した日本市場が後発者の利益を獲得するのではとのユニークな意見も出た。本発表はパッケージ商品の売上に依存する現在の日本レコード産業について、問題提起をするものであり、質疑応答を含め刺激的な発表であった。

3. 椎葉克弘 (オリコン DD)・柴台弘毅 (関西大学大学院)

「音楽を媒介としたコミュニケーションの現在—“会いにけるアイドル” AKB48 を事例に—」

椎葉・柴台両氏の発表は、AKB48 が日本の音楽市場でどのようにして高い人気を獲得できたのかという問いを音楽を媒介としたコミュニケーションの問題として検討・分析したものであった。

本発表では AKB の CD シングルを例に挙げ、同グループの特徴とされる握手会イベントが CD の販売促進とした単なるイベントと異なり、パッケージの価格に含まれ確約された別種のサービスとして機能していることが指摘された。

また、2000 年から CD シングルの平均価格が 1100 円前後に推移する中、AKB の CD シングルの価格は 1600 円と高めではあるが大学生を対象としたアンケートによって、PV や握手券といったサービスのバンドルを前提としているならば、ユーザーは高いと感じながらも許容できる価格であるとの分析が示された。この分析の中で大学生の 8 割が動画サイトによって音楽に触れているとの指摘もなされた。

続いて、AKB を追い掛ける形のアイドルグループのシングル施策を分析する中で、商品を全てポイント化し、ファンの購買・行為をアイドルに反映させるといった「ゲーミフィケーション施策」が、AKB の行う「サービスとコミュニケーション」の発展形であると指摘し、SUPER GiRLS の施策を例示した。併せて従来型のシングル施策である東京女子流との施策比較を行なったが、その中で今後のアイドル戦略では、握手会、ファン投票等のファンの共振施策やファンを共感させるポイントの設定において、A&R が今以上の主体的な関与することが不可欠になるのではとの指摘もなされた。

質疑応答では、他サービスをバンドルした商品の今後の重要性、ファンにとっての楽曲の位置づけ、アイドルグループの女性ファンの増加の関係など様々な質問が行われた。アイドルグループの楽曲の位置づけについては、すぐに結論が出ない問題であるとしながらも、現在ビジュアルとリアル・コミュニケーションが重要視されており、アイドルファンと音楽ファンが異なる文脈として語られているとの応答がなされた。

本発表は、現在レコード産業の中で発生しているア

イドル現象をファンとのコミュニケーションという視点で分析した意欲的な発表であり、また、今後の継続的な分析も期待される発表であった。

(清水 郁弥：法政大学社会学部メディア社会学科)

2012 年度第 1 回関東地区例会報告

今井 晋

2012 年関東地区第一回例会

日時：3 月 25 日 (日) 15:00-17:30

於：法政大学大学院 政策創造研究科 新見附校舎 A501 教室

1. 「ライナーノーツ研究」

高橋聡太 (東京芸術大学大学院音楽研究科音楽文化学芸術環境創造領域修士課程)

2. 「日本におけるネットレーベルの活動—音楽コンテンツの生産・流通とコミュニティの形成—」

日高良祐 (東京芸術大学大学院音楽研究科音楽文化学芸術環境創造領域修士課程)

今年度の関東地区の第 1 回目例会では、昨年度提出された修士論文の発表が行われた。

高橋氏の発表は、日本の洋楽の録音物に付されたライナーノーツの歴史の変遷を、主にそのメディアの形式を追う事によって分析したものである。まず「ライナーノーツ」という言葉の現在の辞書的な意味と歴史的な経緯のズレを指摘し、日本におけるライナーノーツの特殊性に焦点を合わせた議論を行った。さらに、洋楽受容に関わるメディア環境の変遷によって、徐々にライナーノーツに書かれる文章が変質していった点について、具体的な事例を参照しながら概説が行われた。略述すると、ジャケット内のブックレットやリーフレットという日本独自の形式を持ったライナーノーツは、海外の情報が少なかった 60 年代以前には

アーティストやバンドの客観的な情報の記述が主体であったが、洋楽ロックと日本の受け手の距離が縮まることによって、ライターの自己を投影する過剰に熱を帯びた文章が増えていったという。

発表に関する全体的な主張については、概ね納得がいくものであったが、ライナーノーツの文章の内容自体の分析が乏しいのが少々残念であった。特に高橋氏が主張するライナーノーツの「全肯定バイアス」——アルバムを買った人だけが読むというメディアの特性に起因する作品に対する肯定的な評価バイアス——メディア論・産業論的な傍証はあれど、実際にライナーノーツに表れているかどうかの論証は曖昧なままであった。資料の性質上、扱える事例は数が限られるだろうが、ライナーノーツ自体をデータとした内容分析や言説分析などの必要性を感じた。

続く質疑応答では、大学の研究者から産業従事者までを含む JASPM 会員の多様性が良い意味で発揮され、活発な議論が行われた。まずレコードや CD に封入される解説文だけではなく、帯や歌詞カードおよびその対訳についても考察すべきという意見が提出された。高橋氏は資料の制約上、調査の限界があったことを認めつつ、今後の課題とすると応じている。さらにインターネットの普及によって変質したメディア環境をどう捉えるかという、次の日高氏の発表に繋がる論点も議論された。また本発表では扱えなかった観点として、読者側の受容経験についても議論された。活発な質疑を通して、ライナーノーツという独特のメディア形式が日本のロック受容において重要な役割を果たしているという事実は、十分にフロアで共有されたとと言えるだろう。

続く日高氏の発表は、昨今注目を集めるインターネットを介した音楽ファイルの生産と流通現象であるネットレーベルを対象とした研究である。主に関係者のインタビューを通じた調査を通じ、日高氏は既存の音楽産業と比較して、ネットレーベルが単なるコンテンツの生産、流通の組織というよりも、ジェラード・デランティが主張するようなユーザーのコミュニケーションを基盤としたある種のコミュニティであると論じた。

MP3 ファイルが中心となる以前の MOD ファイルによる「デモシーン」——主に北欧を中心とする商用ゲー

ムソフトからクラックしたデータをもとに音楽を制作する ハッカー文化——が存在し、それがネットレーベルの萌芽になったという歴史的概観は興味深かったものの、肝心のネットレーベルに対する分析は不足しているように感じた。研究対象が極めて新しい現象である以上、議論が情報技術を用いた CGM 文化、既存音楽産業論との比較、クラブイベントの参与観察とインターネット上で行われるコミュニケーションの分析と複合的になるのは無理からぬことかもしれない。しかしながら、発表全体を通してネットレーベルという存在の曖昧さ、流動性ばかりが目につき、研究対象への精査が不足している印象を受けた。

質疑応答においても、多数存在するネットレーベルの差異化の仕方、既存のレコード産業やインディーズ・レーベル、アマチュア音楽シーンとの違いに関する質問に対して、日高氏はオンライン、オフラインの両者を通じたコミュニケーションの重要性を指摘するのに留まっていた。さらに、調査対象に対する日高氏の参与の仕方への批判もあり、新しい現象を学術研究の対象とすることの根本的な難しさが浮き彫りになった。結果、日高氏は応じられる範囲で真摯に応答し、自身の研究がはらむ課題を再確認することになった。

例会全体を通して、両氏の研究が未だ発展途上であることを確認することになったが、参加者は少なかったものの議論は活発に交わされた。何よりもポピュラー音楽研究を志す若手研究者の少なさを危惧していた報告者にとっても、このような修士論文発表会は大変刺激となり、今後の研究の重要な原動力となりうる。

(今井 晋: 東京大学人文社会系研究科基礎文化研究専攻 (美学))

2012 年度第 1 回関西地区例会報告

槇田 盤

2012年第1回関西地区例会

日時： 5月19日

会場： 関西学院大学 大阪梅田キャンパス

1. 「混淆・越境・オリエンタリズム——「玫瑰玫瑰我愛你」(‘Rose, Rose, I Love You’)の原曲とカバー・ヴァージョンをめぐって」

西村正男 (関西学院大学社会学部)

西村さんは、中国近現代文学の研究者であり、中国レコード文化史の研究も精力的に進められている。今発表は、「玫瑰玫瑰我愛你」という曲が、1940年に中国・上海で作曲・録音され、1951年に‘Rose, Rose, I Love You’ となって欧米で流行歌となり、現在はアジア各地の歌手が歌うようになっていることを、多様な音源や映像とともにご紹介いただいた。

最初の録音は、「天涯歌女」という映画の挿入歌として、姚莉という女性歌手が歌ったものであった。美しい「玫瑰」(中国語でバラを意味する)をわたしは愛する、というたわいもない歌詞で、ジャズバンド編成の軽快な伴奏の上に、中国風メロディがのっている。作曲は、当時、上海の流行音楽界を代表する陳歌辛という作曲家、演奏は、当時の上海で録音やダンスホールなどで演奏していただろう西洋音楽の演奏家たちで、白系ロシア人などを含んでいたであろうと説明された。続編にあたる曲やよく似た曲が録音されていることから、当時の上海で流行し、そこを発信源として周辺各地で聴かれたことであろう。

‘Rose, Rose, I Love You’ は、Frankie Laine (ローハイドの主題歌を歌った男性歌手)によって歌われ、1951年に英国と米国で発売、ビルボードの3位にまでなった。歌詞は、英国軍人が東洋の赴任先で愛してしまった女性をバラにたとえて、自分は去らなければならないがバラよ愛しているよ、という歌詞になっている。その、いわゆる「蝶々夫人」的身勝手な白人男性とアジア女性というストーリーとともに、オリエンタル調のポピュラー音楽の代表曲として人々に記憶された。同年、Petula Clark という女性歌手も‘May Kway’ というタイトルで歌い、英国のチャートで16位になっている。中国風の流行歌として知られているが、その記憶はあいまいだとして、1984年

の David Bowie のドキュメンタリー風映画の中の1シーンが紹介された。たしか、香港は政治的な立ち位置が微妙で、個人もそれぞれたいへんなのよ、といった会話の文脈の中で、突然 Bowie がこんな中国の歌があったよね、とロザさむと、それを知っているというまわりの人々が歌いだして、最後、李香蘭が歌ったのよ、というセリフで(注釈なしに)終わる。

このように欧米に知られている曲を、アジアはどのように受け止めたのか。1961年、潘迪華(Rebecca Pan)という女性歌手が、重厚なジャズオーケストラをバックに、ほぼ英語で歌っている。この歌手の影響を強くうけている Dick Lee が1986年にカバーしている。Lee は、のちにこの曲のことを、マレーシアやシンガポールで活躍したストリップパー Rose Chan への思いを歌った曲であると書いている。(ただし、西村さんは、年代が微妙にあわないと指摘された。)さらに2007年には、マレーシアの女性映画監督 Low Ngai Yuen が、Rose Chan の生涯を描いたミュージカル‘Rose, Rose, I Love You’ を制作している。ここでは、マレーシアの女性が、自分たちの文化を表象するものとして、この楽曲を位置づけるようになった。

質疑応答では、1940年頃のレコードへの検閲がどのようなもので、バラにはとげがあり、雨風に耐えて美しい花を咲かせる、といった歌詞が、当時の中国人への弾圧へのプロテスト的な意味合いがあるのではないかと、といった指摘(ホプキンスさん)や、服部良一と陳歌辛との関係の深さ、「バラが咲いた」(1966年)を作詞作曲した浜口庫之助への影響があるのではとの指摘(谷奥さん)、戦時下のマレーシアなどへの上海や台湾からのレコード流通などについて(福岡さん)など、活発に議論がなされた。

のちの懇親会でも、ポストパンクにおけるチャイナブーム、オリエンタル志向、映画の世界でのブルース・リーの深刻さからジャッキー・チェンの軽さへの転換、ポピュラーカルチャーにおける非白人の「連帯」といった話題がでて、たのしいひとときであった。西村さんは、JASPM 会員となられるとのこと。「日本ロック創成期に中国系音楽家が果たした役割——在日華僑・華人音楽史の一環として」というご発表もすでになされておられるようで、JASPM におけるご活躍に期待したい。

2. 「弘大前インディ文化の構造転換」

高原基彰（関西学院大学社会学部）

高原さんは、この春から関西学院大学の教員となられたとのこと。韓国・ソウルのサブカルチャーの中心とされてきた「弘大前」（ホンデアプ）で、どのようにパンク・ロックのインディーズ・ブームが出現し、それが政治的対立をはらんで、街の再開発や業態の変化をおこし、それが韓国のポピュラー音楽にどのように影響しているのか、詳細に紹介された。

弘大前は、もともと裕福な住宅街であったが、徐々にアトリエやカフェなどが集まるおしゃれな盛り場となり、1988年のソウルオリンピック開催頃から、留学生や外国留学後に帰国した若者が集まるようになる。1994年、韓国初のライブハウス（バー兼業ではなく専門の）である「DRUG」が開業。次第に人気を集め、他にもライブハウスがいくつも開業し、パンク・ロックのバンドのミュージシャンやその予備軍となる若者たちが弘大前にあつまるようになった。ちょうど、欧米系メディアがアジアに進出し、パンク・ロックが（そのサブカルチャー的かつ反商業主義的性格を有したまま）ポピュラー音楽の1ジャンルとして認知度を高めた時期にあたる。それまで、テレビ画面で見ただけの「輸入文化」であったパンク・ロックが目前で演奏される「夢の場所」だったという。1996年に韓国のレコード検閲制度が廃止され、1999年にライブハウスの営業が合法化されるなど、韓国の左派イデオロギーに後押しされる形で、弘大前でインディーズ・ブームが隆盛となった。

しかし、弘大前の主流は、小規模でバンド演奏を純粋に楽しむライブハウスから、酒を飲み踊る商業的なクラブに移行する。毎月最終金曜日、クラブ1店舗分の入場料で弘大前のほぼすべてのクラブに出入り自由となる「クラブデイ」が2001年に始まり、街全体に朝まで人があふれかえるようになった。2002年、ワールドカップ開催に向けて、弘大前は外国人観光客誘致に向けた「戦略地域」に指定され、「クラブデイ」は「地域文化行事観光商品化支援事業」に選定される。さらに「創造的都市」の理念を輸入し、地域の再開発として「歩きたい道」計画が進められた結果、

屋台やバラックのような店舗が取り壊され新しい飲食店などが増え、広い道路やステージのある広場（マダン）が作られた。こうした動きは、クラブ経営者らによる「クラブ連帯」が新自由主義的な行政との関係を積極的に深めた結果であり、旧来からのライブハウスの反商業主義的イデオロギーとは対立していた。さらに、再開発で集客力を高めた結果、地価が高騰し、小規模な店舗は撤退を余儀なくされていった。こうして弘大前は、文化的な必然性を失い、資本力を持つ商業施設が立ち並ぶ街となっていく。

それにあわせて、バンドによる音楽の質も変化していく。例としてあげられたバンド「ノーブレイン」は、1998年の「青春98」では、日本のブルーハーツに影響されたような若者の閉塞感を歌っていたが、作詞作曲を担当していたギタリストが2002年に脱退したあとビジネス志向を強め、2006年、パーティーロックのような「お前おれのこと好きでしょ」を大ヒットさせる。

とはいえ、クリアランス的な再開発は途中で修正され、旧来のバラック的なエリアが保存された。また、若者の自由や創造性を象徴するエリアとして、若者の失業対策を進める団体が、そうした若者に开店させるフリーマーケットを弘大前で実施するなど、弘大前の従来のイメージを再評価する動きもあるとのこと。音楽の世界でも、再度の「左傾化」の兆候があるらしい。

質疑応答では、「非・欧米でもサブカルチャーは成立するのか？」という点について白熱した議論があった。高原さんは、海外市場で半分以上の売り上げを得ている英米の音楽産業においては、サブカルチャーとなるパンク・ロックでもビジネスとして成立しているが、韓国など、それぞれの国の社会構造の中だけでは成立しないとお立場であった。同様の状態はブラジルにもあり（輪島さん）、どこの国でも、欧米のサブカルチャーに忠誠を尽くしてしまうミュージシャンがいるとの話もあり、日本の中堅のバンドは、個人レーベルを作り、コアな少数のファンしか対象としない（「ディナーショー」的な！）ビジネスモデルを構築しているという指摘（増田さん）などがあった。また、日本と比較として、音楽文化の表現やビジネスが、政治的な対立や運動とむすびつかないことについての議論もあった。紹介された曲のリストを、youtubeの

URI などともにメーリングリストに流してほしいとのリクエストもあった（ぜひお願いしたいところ）。

高原さんがレジュメを離れて「どうでもいい話ですが……」との前置きで話されることが、わたしにはどれも興味深かった。ソウルオリンピック以降、韓国の音楽シーンは「ダンスポップ」一色となり、それがK-POP となって文化輸出されているが、あれが韓国を代表する文化といえるのか。KARA が好きだといったら多くのまともな韓国人は首を傾げるであろう。韓流ブームだといって、日本からおばさんが大挙して韓国のロケ現場に観光に来るが、韓国ではバカにされているのだ。ビジネスとしての文化産業を仕掛けて輸出するというのは、健全なことではないのではないか……

梅田茶屋町のビル10階のきれいな会場で20人ほどの参加者、懇親会からの合流者もあり、にぎやかで有意義な例会であった。わたしはとってもしぶりの参加で、福岡さんの髪が白くなり、増田さんが自分の学生を懇親会で売り込んでいる……など、ひとつひとつが新鮮であった。懇親会でビールがなかなか出てなくても、だれも文句を言わないなんて……あの村田さんがいらっしやらないことをあらためて実感したのでした。

（槇田 盤 ・ 京都大学（技術職員））

付記

なお例会後に高原氏から、発表内でふれたいくつかの曲について、それらが視聴できるURI の教示があった。以下に記しておく。（関西地区研究活動委員 鈴木慎一郎）

넌 내게 반했어（「お前おれのこと好きでしょ」、No Brain）

http://www.youtube.com/watch?v=u_CQB1scYuw

청춘 98（「青春98」、No Brain）

<http://www.youtube.com/watch?v=8rkq8eGV4WY>

싸구려 커피（「安物のコーヒー」、장기하와 얼굴들（チャン・ギハと顔達）

http://www.youtube.com/watch?v=vPDD5AHBP-8&feature=results_main&playnext=1&list=PL059A7BAE6DDEA939

成城大学グローバル研究センター公開シンポジウム報告

葛西 周

成城大学グローバル研究センター公開シンポジウム
「日本のポピュラー音楽をどうとらえるかーグローバルとローカルの相克ー」報告

日時：2012年1月28日（土）

会場：成城大学

本シンポジウムは成城大学グローバル研究センターの活動として催されたものである。司会とコーディネーターを務めた東谷護氏は、20世紀後半のパラダイム・シフトを迎えるまでポピュラー音楽のような流行り廃りのあるものは学問対象として見られにくかった一方、その後のポピュラー音楽研究には「歴史的視点の欠如」あるいは「印象批評まがいの論考」という問題が生じていると指摘し、そのような状況と一線を画すべく、歴史的視点を持った研究者による今回のプログラムを企画したと開催趣旨で述べている。全体は基調講演一本・発表三本とコメント・総合討論からなる。

1. 基調講演 “Uncool” な日本の再発見：「流行歌」にみる大衆文化のポリティクス

永原 宣（マサチューセッツ工科大学）

永原氏の講演は、日本の大衆文化が現在「クールジャパン」という言葉で語られている背景を問い直すべく、戦前の流行歌に対する“Uncool”なイメージ、すなわち「低俗」ないし「卑俗」といった、疑念や嫌悪感を伴う語りに焦点を当てたものである。発表では特

に《東京行進曲》(1929)についての批判的な言説が参照され、商業的な大衆娯楽が階級意識を揺るがすのではないかという危機感が、流行歌批判を通じた「日本文化全体の検閲」へと当時のエリートを導いたと指摘された。その背後には、「流行歌＝低俗なもの」という前提が共有されていたはずのエリート層から作曲家・作詞家・歌手などのレコード業界関係者が排出され、他方でレコードの購買層も経済的に余裕のあるエリート層と一致する、という矛盾した社会状況があった。その例として示された、伊庭孝による新聞紙上での《東京行進曲》批判は、作詞者の西條八十がもっと高等で民衆の趣味を向上できるような立場でありながら、悪趣味な詩を好んで作り、民衆を指導すべき文化エリートとしての立場を放棄している、という内容である。

以上のことから、流行歌批判は大衆におけるエリートたちのアイデンティティ確立をめぐる攻防であったと永原氏は位置づけた。また、1960年代の演歌の誕生までこのような大衆文化をめぐるポリティクスが継続すること、そしてこのような流行歌批判は当時世界で同時進行的に発生しており、ローカルなストーリーであると同時に、グローバルな性質を備えた事例であることが示された。

2. 発表 日本の「中国」と日本ポピュラー音楽：明治時代から昭和初期まで

エドガー・ポーブ（愛知県立大学）

ポーブ氏の発表は、中国に対するエキゾチシズムやイデオロギーと日本のポピュラー音楽の発展との関連に着目したものである。今回対象とするような長いスパンの異文化受容においては、文化的要素の表す記号は政治・経済・イデオロギーの風潮に左右されながら、「未知→エキゾチック（国際的・モダン）→普通→懐かしい（国民的・伝統的・時代遅れ）→忘れ去られた」という形で推移していく、ということがまず指摘された。

その実例としてポーブ氏が主に扱ったのは、日本における明清楽である。明治初期の明清楽は、エキゾチックな魅力を持ちながら、近世邦楽と比べると上品であり、西洋音楽と比べると親しみやすいものとして人

気を博していた。しかし、日清戦争を機に中国蔑視のイデオロギーが広まることで、明清楽も蔑視の対象となり衰退する。同時期に学校唱歌などを通じて西洋音楽が、ポーブ氏の図式でいう第二段階へと移行し、日本人にとってエキゾチックで親しみやすいものとなる。他方で明清楽は「普通化」の段階に入り、月琴を伴奏に中国と無関係の歌を歌う演歌師や、明清楽のレパートリーを転用して作られた流行歌などが大正時代まで見られた。日中戦争が勃発すると、エキゾチシズムを活用できるような新たな帝国主義のイデオロギーへと移行する中、明清楽は中国を表す記号として復活したという。

このように、明治時代は単なる西洋化の時代ではなく、日本に影響を与える国際文化としての中国の役割の衰退と、それに取って代わった西洋の役割の拡大、という構図を見て取る必要があり、そのような点で日清戦争は日本音楽史の転換期と捉えうるとポーブ氏は結論づけた。

3. 童謡、この未知なるもの

周東 美材（日本学術振興会特別研究員）

周東氏の発表は、大人の（ための／による）音楽やカウンターカルチャーがポピュラー音楽の研究対象とされやすい傾向に対し、日本におけるポピュラー音楽に根本的に存在すると考えられる「子ども」的なものを探る、という立場から「童謡」を扱うものである。

周東氏が参照する遠藤薫の議論によると（遠藤2009）、近代国家は共通して宗教的権威の失墜と家庭の生成を経験し、これにしたがって宗教を代替するような神聖な価値を個人、すなわち家庭の中の子どもに求めるようになる。だが、実際の子どもは学校に通って訓練を受けることで、聖なる子どもから俗なる子どもになり、故に子ども期の維持と子ども期からの離脱を同時におこなわなければならないという矛盾が生じる。そこで周東氏は、童謡運動を牽引した児童雑誌『赤い鳥』において、当初は曲付けを意図せず童謡が書かれていたこと、また読者が自由に節をつけて歌っていた例が通信欄に散見されることを指摘し、不易の童心と童心を宿す器としての身体を前提として、童謡

を歌う身体が一種の霊媒 medium とされていた点に、同志による童心主義の実現をみた。他方で、訓練によって生み出された小嶋くるみの童謡歌唱法を例とし、児童雑誌とは別の意味での「子どもらしさ」がレコードをめぐる再構築されたことに言及した。

周東氏は、童謡における子どもの存在には、グローバルな心性とローカルな身体・言語の駆け引きがあると述べ、常に規定され語られ変容してきた「子どもらしさ」をめぐるポピュラー音楽の力学を今後描く必要がある、と主張した。

4. 「演歌」と「カタコト歌謡」

輪島 裕介 (大阪大学)

輪島氏によると「カタコト歌謡」とは、「日本語を母語としない外国人による日本語歌唱」ないし「外国人風の発音による日本語歌唱」「外国語混じりの日本語歌唱」を指す。本発表は、「日本調＝不動の伝統」対「洋楽調＝進歩発展する近代」という本質主義的な前提を留保し、異文化と自文化が創造され表象されてきた過程を考察する立場をとる。

永原氏の発表で挙げられたような流行歌の「低俗」な側面を、「土着的」ないし「民衆的」と読み替えて成立したジャンルが演歌である、と輪島氏は述べる。一方、カタコト歌謡とは、外来の音楽ジャンルが入ってくる際に、その外来性・舶来性をわかりやすく記号化し、ある種の雑種性・混血性をもって異文化を「偽装」するものである (大和田 2011)。さらに、ジャズ・ソングの流れを汲んだ演歌などのレコード歌謡や J-POP に移入され、次第に古くさいものになるにつれて、カタコト歌謡に対する「日本的」「伝統的」といった解釈が新たに施されるようになった。輪島氏はこの現象を「演歌化」と呼び、ポーブ氏が提示した異文化受容の過程における記号の推移の問題とも重なるプロセスであると指摘した。そこには、異文化イメージを伴って移入・形成された文化が、時間の推移と共に自明化していく中で批判や嫌悪の対象になる裏返しとして、「国民的」ないし「伝統的」と肯定された文化様式になる、という価値転倒のメカニズムが確認される。このように大衆文化が国民文化として語られる過程は、サンバやジャズ等、いま「国民的」と言わ

れる諸ジャンルに共通して見出すことができる。グローバル／ローカルとは、近代性というものをどのような形で意味づけ解釈し飼い慣らすかということに関する二つのベクトルである、と輪島氏は結んだ。

5. コメント・総合討論

討論者：佐藤 良明、毛利 嘉孝 (東京藝術大学)、
安田 昌弘 (京都精華大学)

佐藤氏は人文学の諸領域が対象を自己から遠ざけることによって進められてきた傾向に言及し、身近でローカルな事象のなかにグローバル、延いてはユニバーサルな人文学の根本問題が見えてくると述べた。

毛利氏は、過去から未来に向けてグローバル化は加速しているという語りやされがちなことに触れ、既に近代化の過程において文化交流が重要な役割を果たしてきたことが各発表の事例から明らかであると示した。また、国家のような物理的な地理空間に囚われない歴史記述の方法を考える必要性を提起した。

安田氏は、各発表にみられたようなグローバル／ローカルの二元論では括れないような視座について今後検討されるべきであり、移動の過程で変形していく文化的要素についても、グローバル／ローカルという枠組みを再検討することで考察できると指摘した。

また、東谷氏より「語りやすいからジャンルごとに細分化して語る、という傾向が見られるが、ジャンルの壁を取り払って考察していくことが重要ではないか」という発言があった。今回の発表で扱われた日本の音楽は、とりわけジャンル毎の研究が伝統的に進められてきた対象である。ジャンルを超えて影響力を持った時代性や社会的状況を考察する上で、今回のグローバル／ローカルのようなジャンル横断的に検討可能な視座が、まさにいま求められていると言えよう。

なお、今年度も1月下旬に今回の続きとなるシンポジウムが開催される予定とのことである。今回共有された問題意識に基づき、精緻な事例調査から枠組みの検討を重ねていく場が引き続き提供されることを期待したい。

(葛西 周：東京藝術大学)

河端茂氏と JASPM、チャールズ・ハム氏と JASPM

三井 徹

前号の「中村とうよう氏と JASPM」で触れた河端茂氏のことも記しておきたい。2007年12月29日の早朝に77歳でご逝去のあと、追悼文を当ニューズレターに二度申し出たものの（2008年1月16日、及び4月9日）、残念ながら当時の担当者から返答はなしだった。

名簿を辿ってみると、橋爪大三郎会員作成の1990年2月現在の日本ポピュラー音楽学会準備会会員名簿（88名）にお名前が見つかった。

その数ヶ月前である1989年10月15日の当ニューズレター2号に掲載された「こんな方々が、会員です」の54名中には見当たらないが、その号が参加を呼びかけている11月5日に東京芸大で開催の第1回日本ポピュラー音楽学会準備会大会では、「テーマ・セッション：著作権とポピュラー音楽」の発表者4名の一人としてお名前があり、現に自分が依頼をした。当日、河端氏は急用で欠席し、原稿を司会者である自分が代読したものの、河端氏はとにかく JASPM の第1回大会に関与して下さった。

お声をかけたのは、前年1988年の久し振りの再会がもとになっていて、集英社刊『イミダス』の「ポピュラー・ミュージック」を共同執筆する申し出が4月下旬にあった。創刊の1987年版と1988年版の同項目を担当していた相倉久人氏に代わる一人となった河端氏は、5月には、最終稿に向けて集英社の担当編集者と金沢に来られ、1988年の暮れ刊行の『イミダス』1989年版の「ポピュラー・ミュージック」の項目は、全国に広く日本ポピュラー音楽学会準備会を知らせる窓口となった。その後2002年版を最後に二人とも『イミダス』を離れるまで、毎年 JASPM のことを紹介できたのは、河端氏と組んでこそのことだった。

1988年の再会が久し振りであったのは、22年振りだったからだと思う。実質的に中村とうよう編である

1966年刊の共著『フォーク・ソングのすべて：パラッドからプロテスト・ソングまで』（東亜音楽社発行、音楽之友社発売）の二人の担当編集者の一人が、中村氏より少し年上の河端氏だった。1966年5月28日の日記に、「五時半すぎ、中村東洋氏に電話。六時半に四谷の「あしたば」（明日葉）へ行くことになる。出版社の人とあうことになるらしい」と書いていて、お会いしてみると、「二人共若い。一人は酒をのまぬ人とか」と河端氏が下戸であることを既に記録していた。当時、河端氏は月刊誌『ポップス』の編集者の一人であり、今にして思えば、話題にせずじまいだったが、1964年3月に編集部に出した自分の手紙を最初にお読みになった一人に違いない。

1966年以後のご活動については『イミダス』の筆者紹介程度にしか存じ上げないが、1977年刊の『レコード産業界』は、同業界就職希望者に重宝されて版を重ねていた。ケンブリッジ大学出版局刊 *Popular Music* で日本特集を組みたいというリチャード・ミドルトン氏の申し出があったのは、『レコード業界』と改題されたその本の1990年版が出て間もない頃で、日本のレコード産業について河端氏に執筆をお願いした。（そして、初期流行歌作者について、中村とうよう氏にお願いした。）

その後、1992年12月に出た『日本レコード協会50年史』では、「編纂グループ」の一員として尽力なさり（実質的執筆者であったとも聞いている）、同じく編集委員の一人であった1999年1月刊の渡辺プロ・グループ40年史『抱えきれない夢』では、渡辺美佐氏が、「ジグソーパズルに向かうような根気仕事に徹して、広く多岐に亘る社業の全体像をまとめて下さった執筆の河端茂氏」と感謝している。

河端氏にそんな人脈があつてこそ、1993年の5月から東京工大で三回開催の JASPM 関東例会「レコード産業を考える」は実現し、ソニーミュージック副社長の丸山茂雄氏、ワーナーパイオニア社長の折田育造氏、東芝 EMI 専務の石坂敬一が順に来て下さった。三人のお話は、本音は出しにくかったにしても、JASPM の会ということで相応の準備に基づいていた。

1997年の IASPM 大会を JASPM 大会と合同で金沢開催するに際してお世話になったのも、その人脈のお陰だった。ソニーの丸山氏、そして稲垣氏、ビクターの

佐藤氏、ポリグラムの石坂氏などにお会いして資金援助を申し出るのに、河端氏がご一緒して下さいました。新譜の見本盤が送られてきたりライナー・ノーツを引き受けたりしていた、自分が30代であった当時の若手制作担当者世代とはいえ、幹部に昇進されたその方々への願いは、河端氏同行でなければ実現は難しかった。

個々の会員との接触は限られていたが、河端茂氏のJASPMへの貢献は忘れられない。

* * *

昨年10月16日に86歳でご逝去のチャールズ・ハム氏とJASPMとの最初の小さな関わりは、1987年11月15日のことだった。

国際ポピュラー音楽学会(IASPM)の日本支部(その時点でのJASPM)の第1回総会「ポピュラー音楽を考える」(豊島区勤労福祉会館で開催)の二日目に、自分が、「日本でのポピュラー音楽研究への展望」と題してなるべく多面的に提案を並べたときに、歴史研究の部分で、チャールズ・ハム氏に触れている。その数ヶ月前に『ミュージック・マガジン』の連載洋書紹介欄で、大著のアメリカ音楽史(*Music in the New World*, 1983)を取りあげており、それより数年前に取り上げた、同じく包括的なアメリカのポピュラー音楽史(*Yesterdays: Popular Song in America*, 1979)ともどもハム氏を紹介したのである。

1981年9月設立のIASPMの初代会長であったそのハム氏が、JASPM会員との会合に参加して下さいしたのは、1990年7月28日、大阪でのことで、少し前の7月15日に出た当ニューズレターの5号で、細川周平会員が、上記2冊の紹介も添えて、ハム氏を囲むラウンド・テーブル「ロック時代の二つの文化：南アフリカと日本」への参加を呼びかけている。

国際ポピュラー音楽学会日本支部が主催し、日本ポピュラー音楽学会準備会と「日常生活と音楽」研究会関西支部とが協力して大阪ガーデンパレスで開催のそのラウンド・テーブルは、英語で進行し(司会：三井)、由比邦子会員による「日本におけるロックの受容」に続いて、ハム氏(65歳)が「南アフリカ黒人ポピュラー音楽における伝統、変化する政治」を語り、コメンテーターの松村洋会員が話題を展開させ、「フリー・ディスカッション」が活気づいた。その様子は、

同支部が出していた「IASPM 掲示板」の13号で岸田雅子会員が詳しく報告している。(なお、その頁をめくると、同じ90年7月に八王子で開催されたシンポジウム「インドと大衆音楽」の報告にパネリストの一人として中村とうよう氏の名があることに気づいた。)

ハム氏を囲むその会が可能になったのは、7月21～26日に大阪国際交流センターで開催の国際音楽学会大会(SIMS 1990)にハム氏が基調講演者として招かれたからだった。

遡ると、ハム氏が1993年IASPM大会のハワイ開催案の支持を日本支部に依頼してきたことに始まる。隔年開催であるIASPM大会の1989年パリ大会が終わって間もない8月中旬に細川会員から頂いた葉書に、「ハワイ案を日本支部として支持し、実行の時には援助か、スポンサー探しをやってくれないかと頼まれた」とある。結局、ハワイ案は実現しなかったが、約半年後の1990年1月発行の「掲示板」11号で、細川会員が、「チャールズ・ハム氏、来日決定」と報告している — 「昨年11月付の私信によると、[...]大阪で開催される国際音楽学会に招待され、「音楽の異文化受容における現代マスメディアの役割」という論文を発表する。その機会に日本支部と会えないだろうか、とのことだ。もちろん大歓迎だと返事をしておいた」。そして、それに続いて、4月発行の「掲示板」12号に、「瀬山徹氏ほか関西の有志数名が実際に動いてくれることを約束している」とある。

翌月の5月21日に自分が、別件で米国北東部を訪問したついでに、ダートマス大学の研究室にハム氏を訪ね、日記によると、「7月の日本でのIASPM-Japanの会のことについての打合せをもう少し。発表の内容もわかる。[...]あれこれ一応、言うておくことは言うし、Hamm氏としても知っておきたいことはわかったはず。IASPM-JapanとJASPMが共存するのはどういうことかという質問にも答えておく」。

大阪に招かれたハム氏の最初のJASPMとの実質的接触は、SIMS 1990での基調講演の五日後である7月26日の宝塚行きだった。お膳立てして下さいました宝塚在住の瀬山徹会員、そして村田公一会員、小川博司会員、オーストラリアの日本音楽研究者アリソン時田氏、それに小生と一緒にハム氏が観劇した雪組の「黄昏の

「ハーフ・ムーン」は、「ブロードウェイ・ミュージカルふう」で、「音楽はすべて 40 年代、50 年代」と日記に書いているのは、ハム氏の感想を反映している。翌日の 27 日は、海外からの SIMS 1990 出席者向けの京都バス旅行で、自分は、運営に奔走の山口修氏（阪大）の依頼を受けて、二条城、金閣寺、平安神宮、清水寺を巡るハム夫妻とブルーノ・ネトル氏のお伴をした。「とにかく暑い、暑い」と書いている。

ラウンド・テーブルは、学会も観光も終わった翌日、ハム夫妻が帰国の途につく前のことで、それだけに、約 20 人の参会者から成る、最後に「話し合いが盛り上がった」集まりは、ハム氏にはとりわけ印象深かったと思いたい。

その後ハム氏には、1992 年 2 月にルイジアナ州立大学で開催のアメリカ音楽学会大会（80 歳のジョン・ケージの講演もあり）、1993 年にパシフィック大学で開催の IASPM 大会でお会いした。自分がダートマス大学の客員教授を務めた 1995 年の 3 月から 6 にかけては、ご自宅にもお伺いして、何度かお会いした。（そのダートマスへの招聘は、既にご退職のハム氏ではなく、幸田文研究で学位取得のアラン・タンズマン氏によるもので、1993 年に「美空ひばりと戦後日本のノスタルジア」と題した国際交流基金への助成金申請が通って、タンズマン氏が金沢に来訪といういきさつがあった。）

ハム氏にはそんな繋がりから、1997 年に合同開催の IASPM 大会と JASPM 大会の開会挨拶をお願いしたが、いざ大会が近づいた時点で、72 歳のハム氏は金沢への旅は無理ということになり、頂戴した原稿を自分が代読した。IASPM の進展を振り返り、アジア地域での初の大会への思いを寄せたそのご挨拶が、結局は IASPM 会員への挨拶の最後となった。そして、IASPM 会員が集う場にハム氏が姿を見せたのは 1993 年の大会が最後になってしまった。

* * *

一方、「中村とうよう氏と JASPM」を書き終えた一週間後の 1 月 17 日に、「リズム&ブルーズのゴッドファーザー」、ジョニー・オーティス氏が 90 歳で亡くなられた。

22 年前、1990 年 5 月 13 日の金沢公演を機会に、69 歳のオーティス氏をお呼びして、JASPM 北陸支部第 1

回例会を「ビッグ・ピンク」で開催したのを思い出す。演題は「白人による黒人音楽の流用と搾取について：黒人音楽界にいる者の立場から」だった。

（三井 徹）

JASPM 第 24 回年次大会にむけて

大会実行委員長 南田 勝也

日本ポピュラー音楽学会第 24 回大会は、武蔵大学で 2012 年 12 月 8 日（土）9 日（日）に開催されます。武蔵大学は池袋から西武池袋線で三駅、江古田の街に立地しています。江古田には他に武蔵野音楽大学と日本大学芸術学部があり、駅には「のだめカンタービレ」のイラストも展示されていて、音楽と漫画の街といった雰囲気があります。武蔵大学には音楽系のコースはありませんが学生バンドは盛んで、ポピュラー音楽学会大会を開催するにはよい環境かと存じます。今年は前夜祭も復活させ、7 日（金）の夜に何か企画をしたいと考えております。皆さまのご参加に向けて準備を進めてまいりますので、よろしく願いいたします。

年次大会発表申し込みについて

研究活動担当理事 安田 昌弘

第 24 回日本ポピュラー音楽学会年次大会は、武蔵大学を会場に、南田勝也実行委員長のもと、12 月 8 日（土）9 日（日）に開催されます。

つきましては、個人研究発表とワークショップの企画案を、下記の通り募集します。発表を希望される方は JASPM のホームページ

<http://www.jaspm.org/conf2012.html>

より発表申込書(ワードファイル)をダウンロードし、必要事項を記載して、下記アドレスまでメール添付で送信してください。

- ・申込書には「個人発表用」と「ワークショップ用」の別があります。
- ・郵送等による申込を希望される方は、下記「問い合わせ先」までお尋ねください。

受付締切後に研究活動委員会で発表内容を吟味し、発表に関するお知らせを個別に連絡させていただきます。

◎申込要項

受付締切 2012年7月23日(月)中に必着のこと
7月25日(水)を過ぎても受領の連絡がない場合は、問い合わせ先にご連絡いただくようお願いします。

◎送付・問い合わせ先

研究活動委員会 安田昌弘
連絡先 yasuda@kyoto-seika.ac.jp
tel/fax 075-702-5288

◎発表時間は例年通りです。

- ・個人発表：30分(発表20分+質疑10分)
- ・ワークショップ：3時間

◎ワークショップ企画案について

ワークショップでは、一つのテーマについて、多角的に提起される問題について、フロアとパネルの間で時間をかけて議論することができます。ご自分の研究フィールドの意義を知らしめる絶好の場だと思いますので、ふるってご参加ください。

パネルには通常、発表者(問題提起者=3名ほど)

が並びます。非会員の方も問題提起者になることができますが、謝礼や交通費は支払われません。

なおワークショップでは発表者以外に、発表後の討議を進める「討論者」一名を置きます。討論者の選択については、後日研究活動委員会より相談させていただきます。

◆information◆

理事会・委員会活動報告

2012年第1回理事会(持ち回り)

2月23日 議題送付 / 3月2日 回答〆切

議題1 前回議事録案の承認

議題2 新入会員の承認

議題3 2011年第4回理事会での7条退会候補者への照会結果と退会の承認について

議題4 退会者の承認

事務局より

1. 原稿募集

現在お読みいただいているJASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちでJASPMの活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から1000字から3000字程度が望ましいです。Textファイル形式またはMS-Wordにて、メール添付にてご投稿ください。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。ニュースレター上

で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限
定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削るこ
とがありますのであらかじめご承知おきください。

ニューズレターは86号（2010年11月発行）より学会
ウェブサイト掲載のPDFで年3回（2月、5月、11月）
の刊行、紙面で年1回（8月）の刊行となっております。
住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行
される号にのみ掲載され、インターネット上で公開さ
れることはありません。PDFで発行されたニューズレ
ターはJASPMウェブサイトのニューズレターのページ
に掲載されています。（URL：
<http://www.jaspm.jp/newsletter.html>）

次号（93号：紙面刊行）は2012年8月発行予定で
す。原稿締切は2012年7月20日とします。また次々
号（94号：PDF刊行）は2012年11月発行予定です。
原稿締切は2012年10月20日とします。

2011年より、ニューズレター編集は事務局から広
報担当理事の所轄へと移行いたしました。投稿原稿の
送り先はJASPM 広報ニューズレター担当

(nl@jaspm.jp) ですので、お間違えなきようご注意
ください。ニューズレター編集に関する連絡も上記に
お願いいたします。

2. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更があった
場合、また退会のご連絡は、できるだけ早く学会事務
局 (jimu@jaspm.jp) までEメールまたは郵便でお知ら
せください。

現在、学会からの送付物は、ヤマト運輸の「メール
便」サービスを利用しております。このため、郵政公
社に転送通知を出されていても、事務局に住所変更の
ご連絡がなければ住所不明となり配達が行われませ
ん。住所変更のご連絡がない場合、学会誌や会費請求
書類、大会案内ほかの送付物がお手元に届かないなど
のご迷惑をおかけすることになってしまいます。

例会などのお知らせはEメール（JASPMメールニュー
ズ）にて行なっております。メールアドレスの変更に
ついては、速やかなご連絡を事務局までお願いいたし
ます。

3. 連絡先不明の会員について

下記の会員と連絡がつかなくなっています。ご本人
がこれをご覧になっておられたら至急事務局宛にご
連絡をお願いいたします。

もしくは連絡先（住所または連絡がつくメールアド
レス）をご存知の方がおられましたら、事務局
(jimu@jaspm.jp) までご連絡をいただけましたら幸
いに存じます。

- ・ラフマン、シュクル 会員
- ・小室 敬幸 会員

JASPM NEWSLETTER 第92号

(vol. 24 no.2)

2012年 6月 10日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会（JASPM）

会長 佐藤良明

理事 大和田俊之・小川博司・久野陽一・谷口
文和・東谷護・増田聡・南田勝也・毛利
嘉孝・安田昌弘

学会事務局：

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学大学院文学研究科 増田聡研究室

jimu@jaspm.jp（事務一般）

nl@jaspm.jp（ニューズレター関係）

<http://www.jaspm.jp>

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：松井領明